

## 自伝 ～時の流れに身を任せて

著者	溝上 敦
著者別表示	Mizokami Atsushi
雑誌名	金沢大学十全医学会雑誌
巻	128
号	2
ページ	25-25
発行年	2019-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00055871">http://hdl.handle.net/2297/00055871</a>



## 自伝 ～時の流れに身を任せて An autobiography ~ Leave myself to the flow of time ~

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科 泌尿器集学的治療学  
溝 上 敦

私は1987年に産業医科大学を卒業しましたが、当時は大学卒業と同時にもう入局しなければなりませんでした。なぜ私が泌尿器科を選んだかと言いますと、正直なところあまり深くは考えていませんでした。学生の頃は泌尿器科の授業をまじめに聞いておらず、再試も受けましたが、「自分の性格に合わないとか、教授と相性合わない」といったような理由で様々な科を取捨選択したら、残った科が泌尿器科だったのです。言い換えると、泌尿器科に入局するのに「No」という理由が全くなかったのです。入局後はオーブンに付いて様々なことを学びましたが、よくわからないままにオーブンから指示されたのが、8時間かかる膀胱全摘除術の後、摘出した癌組織の一部をマウスの腎被膜下に移植して抗癌剤を投与するという実験の手伝いでした。この実験が終わるのが深夜で、その後毎日マウスを観察するのは大変なものでした。研修医はオーブンの指示にすべて従わなければならないのが当たり前の時代でしたので、愚痴も言わずこの実験を行っていました。しかし、結果としてこの実験の手伝いは、後の私の研究にとっても役立ちましたし、癌研究の始まりとなりました。

実験の手伝いをしていたという理由もあったと思いますが、研修医のときに当時の教授から大学院に進むようにと言われました。大学院では何をやるのかということや、学位の重要性も全く考えたこともありませんでした。言われるままに大学院に進むことにしましたが、研究内容のあてもなかったため、教授から分子生物学教室で研究するようと言われました。分子生物学は学生の頃の苦手科目で、できれば避けたい科でしたが、教授には逆らえず、分子生物学教室で研究を行うことにしました。ところが、分子生物学教室のスタッフに医者出身はおらず、私の指導者の研究テーマが原索動物の「ホヤ」の発生だったため、大学院生活は泌尿器科とは全く無縁の研究から始まりました。DNAすらほとんど忘れていたため、分子生物学や発生学を全く初めからほぼ独学で勉強し直さなければならず、毎朝7:30に研究室に入り、1時間分子生物学の教科書で勉強し、8:30から夜遅くまで指導者の実験の手伝いをするという生活でした。さらにその指導者からは「1年かけてじっくり泌尿器科に関する研究テーマを自分で探すように」と言われたのです。別の基礎系教室に入った大学院生はその教室からしばしば研究テーマを与えられていましたが、私は自分でそれを探さなければならなかったのです。まだ泌尿器疾患もろくに理解できていない私にとって何を研究テーマに選ぶかは難題です。このため1年間は難しい英語論文読みながら、泌尿器科に関連した研究テーマを探しました。しかし、この経験は結果として現在の私にとって非常に有意義でかけがえのないものだったと言えます。他人を当てにせず、自分の力で新しい考えを創造する能力を養うのに非常に貴重な期間だったと思います。また、一見関係のない「ホヤ」の研究も分子生物学の基礎を学ぶには

非常に役立ちましたし、現在、癌を研究する上で発生学の知識も重要であることは明らかです。

この1年間で決めた研究テーマは、日本ではまだ研究している人の少なかった前立腺癌でした。当時前立腺癌の50%以上は診断時にすでに骨転移をきたしていることの方が多く、ホルモン療法が治療の主体で、前立腺全摘除術はほとんど皆無でした。しかし、ホルモン療法は抗癌剤でないにもかかわらず、明らかに患者の予後を改善させることのできるすばらしい治療法です。しかし、数年後にはこの治療法でも再燃し、患者は死に至ります。私は前立腺癌が再燃する機序を分子生物学的手法を用いて明らかにしようと考えました。そこで目を付けたのがホルモン療法と再燃に関係する重要なタンパク質であるAndrogen Receptor (AR)です。1988年にARの遺伝子が同定されていたので、私は同定したシカゴのグループからAR cDNAを譲り受け、ARの研究を開始しました。前立腺癌細胞でのAR mRNAの発現解析から始まり、大腸菌でのARタンパク質の作成、AR抗体の作製を行って最終的に論文作成、学位取得までたどり着くことができましたが、この過程にも「ホヤ」研究の技術がとて役立ちました。またこの前立腺癌とARの研究によって学会で知り合った千葉大学の当時の教授と懇意になり、たまたま千葉に講演に来たARをクローニングした先生にも紹介され、その縁で大学院卒業後にWisconsin大学に留学したのです。そこではARやPSA promoterのクローニングとその解析を行いました。留学中のBossはかなり研究にはaggressiveで、毎週のように成果を上げるよう叱咤されました(激励はほとんどありませんでした)。とても大変な期間でしたが、米国でしかできない生活をenjoyすることで何とか耐え抜き、2年半の留学中に2報の論文を作成することができました。

帰国後も前立腺癌の研究を行っていたのですが、日本の学会で知り合った金沢大学泌尿器科前教授から「研究を中心に行い、院生を指導してほしい」という甘い言葉で金沢大学へ誘われ、2000年に金沢大学泌尿器科に入局したのです。しかし現実には、研究や院生の指導だけでなく、外来、研修医の指導、病棟(もちろん手術、ブラキセラピーも行いました)、などすべてをこなさなければならず、日々ストレスがかかっていました。5年後には不規則な生活のために胃潰瘍や不整脈も発症しましたが、何とか乗り越えてきました。これができたのは家族だけでなく、多くの先輩や若手のDrがいたからであり、彼らがいなければ今の私はありません。

思い起こせば、医者になってから様々なことがありましたが、基本的に自分の転機は自然の成り行きに身を任せていたというのが本音です。しかし、自分置かれた状況の中で自分のできうることを最大限行っていた結果が現在につながっていると思っています。これからも同じように流れに乗って進んでいければと思います。